

『大阪人』休刊

写真は『大阪人』64巻10号、2010年10月「淀川流域8区特集」。流域8区とは、東淀川区、淀川区、西淀川区、此花区、福島区、北区、都島区、旭区。現在、淀川区に住んでおり、私も淀川流域住民の一人だ。

冒頭の「1世紀の流転。」から一大阪には2つの淀川がある。1つは旧淀川。現在は「大川」と呼ばれている。もう1つは新淀川である。明治時代に洪水対策のため、放水路として造られた人工の河川である。新淀川が開削されて100年が経つ。人間の手によって造られた人工の河川も、時間の経過とともに、さまざまな生物を育んできた。また新淀川を新たな舞台とし、魚や貝をとって生活の糧とする漁師も誕生した。近年、大阪では、「水都大阪」の魅力を見つめ直し、今後の街づくりに生かそうとする動きがある。大阪人にとって、新・旧、2つの淀川はどのような意味を持つのか。新淀川誕生100年を契機に、改めて淀川の歴史を振り返り、川から大阪の過去・現在・未来をとらえ直す機会としたいものである。



この「淀川特集」は、引っ越し後も書棚に並んでいたもので、何度も読み返している。『大阪人』は名古屋で暮らしていたときから愛読していた。大阪の歴史や文化、まちづくり、観光などを知るうえで貴重な資料であった。たくさんの写真が掲載され、それを眺めるだけで楽しくなった。退職するとき、『大阪人』の大半を大学などに残してきた。学生さんらに大阪を知ってもらおう資料として。それで手元に残ったのが「淀川特集」と2012年5月号「古地図で歴史を歩く」である。

2012年5月号に、悲しい知らせが掲載されていた。『大阪人』休刊のお知らせ一本誌は、この5月号増刊をもちまして、休刊いたします。……『大阪人』は大正14年(1925)12月、当時の大阪市長・関一が設立したシンクタンク・大阪都市協会が創刊した『大大阪』が前身でした。『大大阪』は近代都市・大阪市のあるべき姿と解決すべき問題を記事の柱にして、市民生活と市政の動きを伝えるものでしたが戦時の紙不足で昭和19年(1944)4月号でやむなく中断、戦後、昭和22年3月号からは『大阪人』と改題し復刊いたしました。以来、「市政と文化」を考える市民雑誌として歩み続け、平成11年(1999)からは当財団で事業を継承し、大阪の文化・歴史さらには市政情報等を発信し続けてまいりました。『大阪人』の経営は厳しい状況にあり、その改善にこれまでも取り組んでまいりました。…本誌も昨今の景気後退の影響を受け、広告収入等が減収し、収支の改善を図ることがきわめて難しく、残念ながら休刊することに至りました。

『大阪人』の休刊は、現在の大阪を象徴するのように感じる。またレポートしたい。

(2018年7月15日)